

慣用句の産出と理解に関わる諸要因 : 日本語学習者と日本語母語話者の比較を通じて

著者	陳 ?
発行年	2019
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2018
報告番号	12102甲第8900号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160123

氏名	陳 雯				
学位の種類	博士（言語学）				
学位記番号	博 甲 第 8900 号				
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	慣用句の産出と理解に関わる諸要因 —日本語学習者と日本語母語話者の比較を通じて—				
主査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三 朋子		
副査	筑波大学 教授	博士（ドイツ文学）	伊藤 眞		
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	松崎 寛		
副査	筑波大学 非常勤講師	博士（言語学）	石田 プリシラ・アン		

論文の要旨

本論文は、日本語の母語話者（L1 話者）と日本語学習者（L2 学習者）が「足を引っ張る」「手を貸す」「面倒を見る」「力を入れる」などの慣用句を理解・産出する際、理解・産出それぞれの過程にどのような要因が影響を与えるかを検討するものである。従来の研究では、英語やイタリア語の慣用句の理解・産出を対象に「透明度（transparency）」「親密度（familiarity）」「類似度（similarity）」などの要因の影響が検討されてきた。しかし透明度に関しては、L1 児童の研究が多くある一方、L1 成人および L2 学習者を対象とした研究は少ない。親密度は、L1・L2 慣用句の理解・産出における効果が指摘されてきたものの、親密度と透明度の関係に着目した研究はない。また、類似度に関しては、L2 慣用句の認知処理において L1 慣用句との類似度が影響しにくいと主張している研究がある一方、このような類似度が L2 慣用句の産出に影響を与えることを示している研究もある。

上記のような背景を踏まえ、本論文は L1・L2 慣用句の理解・産出における透明度、親密度、類似度の影響を明らかにすることと、従来提案されている慣用句の認知処理モデルにおけるこれらの要因の位置づけを検討することを目的としている。本論文で設定している課題は以下の 3 点である。

【課題①】 L2 慣用句の産出について、L2 慣用句の透明度と親密度および L1 慣用句との類似度の影響を明らかにする。また、L2 慣用句の産出過程が、従来提案されている L1 慣用句の産出モデルに基づいて説明できるかを検討し、L2 産出モデルにおける透明度、親密度、類似度の位置づけを論じる。

【課題②】 L1・L2 慣用句の理解について、透明度と親密度の影響を明らかにする。また、L1・L2 慣用句の理解モデルにおける透明度、親密度の位置づけを論じる。

【課題③】 慣用句の認知処理における透明度の影響を明らかにすることにより、慣用句の意味的性質

(一般表現と慣用句を区別する特質)を明確にする。

本論文は以下の7章から構成される。

第1章 序論

第2章 先行研究の概観と本論文の位置付け

第3章 L1 慣用句と L2 慣用句の類似度判断基準について

第4章 慣用句の透明度判断における親密度の影響—母語話者と学習者の比較から—

第5章 第二言語慣用句の産出に影響する要因について—類似度・親密度・透明度を中心に—

第6章 L1・L2 慣用句の理解に影響する要因について—親密度・透明度を中心に—

第7章 本論文のまとめと今後の課題

第1章では、本論文の背景と目的について述べ、各章の概要が示される。

第2章では、先行研究を概観し、問題点を指摘した上で、本論文の研究課題について述べられる。

第3章では、対照研究の手法を用いて「驚き」を表す日本語と中国語の慣用句を分析し、L1・L2 慣用句の意味的な類似度を判断する基準を検討する【課題①】。結果として、辞書における意味定義がほぼ一致している日中慣用句でさえ完全な意味的対応がないことが指摘される。この点から、L2 学習者の認知処理における類似度の影響を明らかにするには、従来重視されてきた L1・L2 慣用句の形式的(構成語の)類似度のほかに、特定の文脈における L1・L2 慣用句の意味的等価性を基準とすることも必要であると主張される。

第4章では、日本語の母語話者と中国語を母語としている日本語学習者を対象に日本語慣用句(例:「泡を食う」「馬鹿にする」)の透明度と親密度に関する調査を行い、慣用句の透明度と親密度の関係を検討する【課題①②③】。母語話者と学習者のデータを比較した結果、母語話者か学習者かにかかわらず、慣用句の透明度判断がその慣用句に対する親密度に影響されること、親密度が高くなるほど透明度判断も高くなること、学習者における親密度の効果が母語話者におけるそれよりも顕著であることが示される。これらの結果から、L1・L2 慣用句の認知処理における透明度の影響を明らかにするには親密度の要因を同時に扱うことが必要であると主張される。

第5章では、中国人学習者の日本語慣用句産出を日本語母語話者の産出と比較し、L2 慣用句の産出過程における類似度、透明度、親密度の効果を検討する【課題①③】。2つの実験の結果として、親密度および透明度は学習者の L2 慣用句産出に影響を与えることが明らかにされ、親密度が高くなると慣用句の産出率も高くなることと、透明度の高い慣用句が透明度の低い慣用句より産出しやすいことが明らかにされる。一方、L1 慣用句との類似度は学習者の L2 慣用句産出に影響を与えないことが示される。これらの結果を踏まえ、従来提案されている L1 慣用句の産出モデルに基づいて L2 慣用句の産出モデルが提案され、L2 モデルには親密度と透明度の効果を加える必要があると主張される。

第6章では、日本語母語話者と中国人学習者における日本語慣用句の理解を比較し、L1・L2 慣用句の理解過程における親密度、透明度の効果を検討する【課題①②】。親密度と透明度以外の要因(例:「字義性」)を統一した実験項目を対象に実験を行い、その結果として、母語話者の場合、慣用句の親密度および透明度の効果が有意であり、親密度の高い慣用句は理解しやすく、透明度の高い慣用句も理解しやすいことが明らかにされる。一方、学習者の場合は、親密度の効果が検証される。これらの結果から、L1 慣用句の理解モデルは、従来提案されているモデルに透明度と親密度を加える必要があるのに対し、L2 慣用句の理解モデルには親密度の効果のみが加えられることが論じられる。

第7章では、本論文の議論をまとめ、今後の課題と展望について述べられる。

審査の要旨

1 批評

本論文は、「足を引っ張る」「力を入れる」などの慣用句を対象に、透明度、親密度、L1 慣用句との類似度という要因が母語話者（L1）および日本語学習者（L2）における慣用句の理解・産出過程にどのような影響を与えるかを明らかにしようとするものである。従来、この3つの要因の影響が明らかにされていない点や、L1・L2 それぞれの理解・産出過程の共通点と相違点が明確でない点もあった。本論文は、L1 と L2 の認知処理過程を比較することにより、L1 慣用句の理解過程および L2 慣用句の産出過程における透明度と親密度の促進効果、さらに L2 慣用句の理解過程における親密度の効果を明確に示した点で、実証的かつ独自性のある研究となっている。また、個々の慣用句の透明度判断が親密度に影響されることを明らかにした点も、慣用句の認知処理に関する今後の研究への有益な示唆になると考えられる。

さらに、日本語慣用句の認知処理に関する研究がほとんど存在しない現状の中、本論文はヨーロッパや北米の慣用句研究を参考に日本語母語話者および日本語学習者における慣用句の理解・産出に影響する要因の一端を明らかにしている点で、日本語慣用句の研究に新しい視点を提供している先駆的な研究である。緻密な実験と丁寧な統計解析を重ねることにより確実な結果が得られている点も評価でき、このような研究方法は今後の研究への応用が期待される。

しかしながら、いくつかの問題も残されている。まず、本論文で提示されている L1・L2 慣用句の理解・産出モデルが十分には明確にされていない点がある。透明度は L1 理解および L2 産出において促進効果が見られる点から、L1・L2 話者の心内辞書に収録されている慣用句の慣用的意味と各構成語の通常の意味との間にリンクが存在することが主張されているが、本論文の実験から、このようなリンクが存在するか否かに関する十分な証拠は示されていない。透明度は本論文の枠内においては有効な概念であるが、慣用句の理解・産出における個々の構成語の意味の促進効果を検証するには、従来扱われてきた「構成性 (compositionality)」の要因を検討することも必要であると考えられる。また、本論文では L2 慣用句の産出において L1 慣用句との類似度の影響が示されなかったが、実験項目数やテストの性質という点から、この結果は一般化しにくい可能性もある。

とはいえ、上記のような課題は、日本語慣用句の理解・産出に関する研究にはさらなる研究の深化が必要とされることを示したに過ぎず、本論文での考察をもとに、今後、さらなる研究により明確な結果が示されることも期待される。この点で、むしろ本論文の発展性を示すものであり、本論文の価値を何ら損なうものではない。

2 最終試験

平成 31 年 1 月 18 日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。